

人々が生き生きと暮らせる
社会をつくりたい



榎原 功 さん
(長谷町・59歳)

最近の報道によると、茨城県立高校では親が失職するなど家庭の経済的理由による中退者が増加している実態が明らかとなりました。そこで、経済的に恵まれない中高生を対象に、奨学金給付などの支援活動をするNPO 法人「希望」の副理事長榎原功さんを訪ねました。

「景気低迷、リストラなど私たちを取り巻く経済状況は厳しいものがあり、親の失職、離婚などにより、学びたくても学校へ行けない子どもがいます。県や古河市にも奨学資金制度がありますが、予算には限りがあります。そこで人々が生き生きと暮らせる社会を作りたいという気持ちから、微力ながら仲間とNPO 法人を設立しました。」と榎原さんはNPO 法人「希望」設立について語りはじめました。

現在「希望」では、高校生4人に奨学金を、また2人に一時金を給付しています。古河市、総和

ぶんがくかん発
Vol.72

同人雑誌『スベニール』 - 戦後文芸活動のさきがけ -

昭和20年11月。まだ日本国中に戦争の傷跡が生々しく残っている、そんな時期、古河の地において、1冊の同人雑誌が生まれました。誌名はオーストリアの作曲家フランツ・ドボルジャークの曲の名から付けられました。その同人雑誌は『スベニール』。

大正から昭和に改元される直前に生まれた、文学が好きでしょうがないという青年たちが、この『スベニール』に拠って文学精進をはじめました。その顔ぶれをのぞいてみましょう。小倉宏平、日向野英一、遠藤保、岩下忠市、荒巖、遠藤晋、山中君三、小柳政治、斉藤晃一、勝間貞利、小倉利三郎、山野麗子等々。その後の古河における文化活動は言うに及ばず、各方面で活躍されている方々が輩出しています。とりわけ古河出身の歴史小説家・永井路子が第2号に「羅」という署名でロマン・ロラン「魅せられた魂」の読後感を寄せているのも注目に値します。

ところで『スベニール』は発行後に合評会を開

いて、次号以降の糧にしていました。「総評としては全般的に修飾および技巧に走る傾向が多く真実性を欠く恨みあり。小さなプライドにこだわらず、より大きな文学的良心のもとに自らの真実の声をペンにする事こそスベニールの進路ではなからうか」(第2号「創刊号短評」)お互いに切磋琢磨してより質の高い雑誌に育てていこうという意気込みが感じられます。



「スベニール」第2号～第5号

徐々に発展しつつあった『スベニール』ですが、昭和21年5月発行の第6号をもって廃刊のやむなきに至ります。GHQの検閲に引っかけたのがその一因ですが、いずれにしても、敗戦後まもない、混乱した、しかも物資の乏しいときにもか

わらず、いち早く同人雑誌が発行されたということは、特筆すべきことであると言えます。

このあたりにも「文芸のまち・古河」を思わずにはられません。

(企画展「古河の文芸」は、9/25まで開催)